

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	野坂 真
論文題目	地域社会における災害復興と地域存続に関する社会学的研究 —東日本大震災前後における岩手県・宮城県の津波被災地域を事例として—
審査要旨	
<p>本論文は、東日本大震災被災地において、災害前から復興期、さらに次の災害に向けての対応へと続く長期的な災害サイクルのなかで、地域社会がどのように被災し、そこから回復していくかなど、災害復興に関わる課題を災害社会学や地域社会学に基づく視点から丹念な調査研究を行ってきた成果である。事例分析の主たる対象は、東日本大震災において最も大きな被害を受けた自治体のひとつである岩手県上閉伊郡大槌町であるが、人口規模や被害の様相の異なる宮城県気仙沼市を参照することで、少子高齢化と経済停滞に悩む日本の地方都市や過疎集落に通底する知見にしようとして試みている。本論文は、復興を支える住民層のライフスタイル像の再構築や、住民層間の補完と調整により地域活動が維持されていく社会構造に踏み込んだ分析により、地域社会の動態に深く迫るものとなっており、地域社会が抱える課題への視座を見出しているといえよう。</p> <p>こうした点で、この論文は、少子高齢化や経済停滞が続くなかで、いかに活力を維持し、地域としての個性を磨きながら、今後どのように地域創生していくかが問われている現代日本の地方都市やその周辺の農漁村集落が抱える地域活性化の課題に向き合おうとした著作でもある。こうした地域は、東日本大震災の被災地のみならず、全国的に広く見られ、その後の災害の発生の度ごとにこうした地域の課題が浮き彫りにされ、地域の存続が問われる状況からして、現代日本に通底する事象であるといえよう。この論文が主たるターゲットとする地域社会は、人口 10 万人以下の都市およびその周辺地域である。</p> <p>論文自体は、極めて実践的な課題を掲げ、それに丁寧に答えようとしたものである。大槌町のような地域で大きな人的被害が発生したのは何故か、その被害はその後の長期にわたる災害過程や復旧復興過程にどのような影響を及ぼしたのか、こうした町のどこにどのような形で地域を再建していく芽生えを見出すことができるのか、それを生かし育てていくための条件とはなにか？などの問いであり、その可能性の模索の実践である。</p> <p>論文で示されている主張は、大きく 2 つに集約することができよう。ひとつは、「大槌町のような地域で大きな人的被害が発生したのは何故か、その被害はその後の長期にわたる災害過程や復旧復興過程にどのような影響を及ぼしたのか」にあたる部分であり、気仙沼市との対比で、大槌町での被害が、町役場の職員を含む、町をまさに担っていた壮年層への人的被害として現れ、町の産業や文化活動の中核部に壊滅的な被害をもたらしたものであったこと、それまでの地域振興とコミュニティ活動の中核にあたる人々の多くが亡くなったため、地域活動という点で経験の継承が極めて難しくなり、それが震災後の外部からのボランティアを地域の文脈でハンドリングしつつ生かすことができず、結果として振り回される事態も招いたことなどである。これは参照点として気仙沼市をとることでダメージの深さを際立たせるものになっているといえよう。気仙沼市の場合は、市の中核的な市民組織や産業組織には大きな人的被害は生じなかった。したがって、それ以前の気仙沼の市民活動を基盤としながら、外部からの支援を吟味し、自分たちのまちづくりの理念に照らし合わせながらハンドリングし生かしていく(理念に沿うものでなければ拒否)ことを実践していった。</p> <p>論文のもうひとつの大きな主張は、「こうした町のどこにどのような形で地域を再建していく芽生えを見出すことができるのか、それを生かし育てていくための条件とはなにか？」に関わる部分である。人口 10 万人以下の市町村では、活動領域が違っていても(例えば産業セクター、民俗文化・芸能セクター、福祉セクター、若者育成指導セクターなど)、人間関係は重層的に繋がっており、何か事業を起こすには、他の領域で中心的な役割を果たす人々の応援を期待せずには成立しない。とくに、小さな自治体になればなるほど、その傾向は強まってくる。大槌町では、被災により地域振興とコミュニティ活動の中核にあたる人々の多くが亡くなるという大きな</p>	

氏名 野坂 真

ハンディを抱え、彼らが持っていたノウハウや他の領域との調整能力などが失われたまま、試行錯誤を続けてきたが、コミュニティ活動という点で未来を展望しうる動きはみられないか？それを無理せず、生活のバランスを確保しながら、地域活動への参加のかたちで、住民を引き留めていく方途はないか？

住民層ごとの相互の関わりとコミュニティ活動への参加の位相という点での分析、各住民層における〈生活のすべ、生きがい、自己納得感〉を念頭においたライフスタイル像の着想などは、そうした背景から生まれてきたものであり、それが地域の社会構造に踏み込んだ分析となり、論文全体が地域社会の動態に深く迫るものになった理由であろう。

公開審査会では、震災10年の時期にこうした重厚なモノグラフが生まれたことを評価する声が大きかった。出版段階では、論文の論旨について、読者に筋立てがはっきり理解しうるものに再編成する方が望ましいとの意見も出されたが、概ね好意的なコメントであった。

学位請求論文の受理以降も、主査・副査を交えて疑問点などを出し合い、学位請求者へのコメントなどを行ってきたが、次の点についての修正が必要であり妥当であろうと、公開審査会において確認されたので追記しておく。

- (1) 地域振興ビジョンという表現を、地域存続ビジョンに統一すること
- (2) 地域の生き残り戦略という表現を、地域存続ビジョンに統一すること
- (3) 「地域のライフスタイル像や地域存続ビジョン、裏の機能の潜在化」という表現を、「地域のライフスタイル像や地域存続ビジョン、裏の機能を地域外の人間は認識しにくくなってしまふ、また地域住民自身も思い出しにくくなってしまふ変化」とし文意を明確化すること
- (4) 自己納得感の初出箇所に注をつけ、概念の意味を明確化すること
- (5) ライフスタイル像の説明として、「生活のすべ、生きがい、自己納得感の3要素が構成する」という表現を、「当事者のライフスタイル像を特徴づける行動や意識に、生活のすべ、生きがい、自己納得感の3要素の組み合わせ方が重要な影響を与える」とし、文意を明確化すること

上記を含め、本論文は、博士学位の授与にふさわしい論文であると審査会一同認めるものである。

公開審査会開催日	2021年 1月 26日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	浦野 正樹	地域社会学・災害研究	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	嶋崎 尚子	ライフコース社会学・家族社会学	
審査委員	専修大学人間科学部・教授	大矢根 淳	災害社会学・環境変動論	博士(慶應義塾大学)
審査委員				
審査委員				